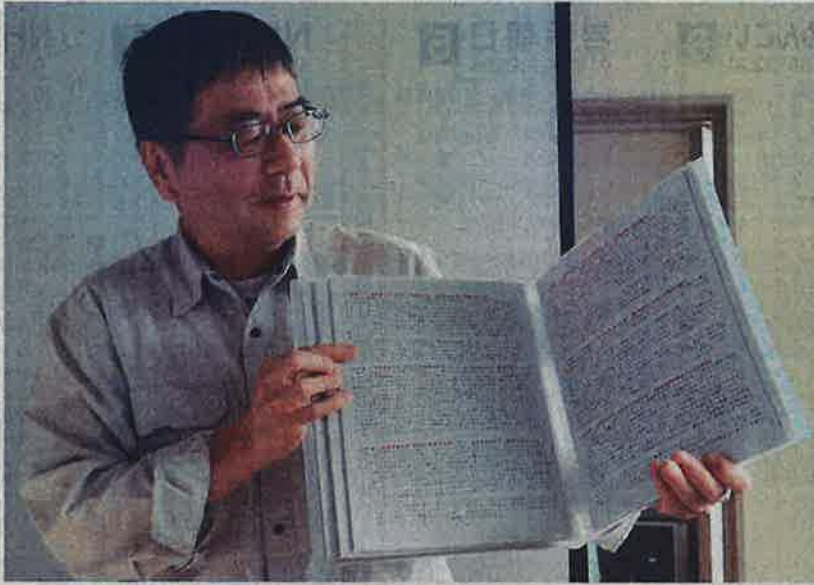


日本大震災
東大 13年

教え子の記憶伝える

東日本大震災を知らない世代に記憶を伝え、防災を考えてほしい。宮古水産高教諭の小笠原潤さん(65)は、2011〜21年度の教え子の高校生が震災や復興について書いた小論文を防災教材として生かしている。「同じ地域、年頃の言葉だからこそ、伝わりやすく自分事になさる」。3日、宮古市で開かれる防災イベントで現役高校生がこの一部を朗読し、若き視座でつづられた体験と教訓を語り継ぐ。

宮古水産高の小笠原潤教諭



小論文を教材に活用 宮古高生きょう朗読披露



「命を守るためのまちづくりや、震災をどう後世に伝えるべきかを考えさせられた」。3日の防災イベントに向け、先輩たちの文章を読み込む宮古高放送部の生徒＝宮古市宮町

「妹の手を強く握って歩きまわした。こいつだけは守ってやらなきゃ」と思ってた(震災当時小学6年)

「明日やろうと思っていたことができなくなりました。当たり前だと思っていたことの大切さに気がつきました」(同中学2年)

「こんなことをすれば多くの人が避難できるのか、それを考えるのはこれからの未来を担う私たちだと思います」(同)

震災当時赴任していた宮古高や、山田高など宮古地域で受け持った生徒の小論文約160編の一部だ。被災体験や伝承、これからの生き方などが600字程度でつづられている。

生物が専門分野で、12年にインドネシア・スマトラ島アチェ州で研修した経験もある。「インド洋大津波と東日本大震災の比較」と題して防災や環境問題を考える授業の後、小論文を課題にした。「苦しい思いをして

書いたと思うが、経験を伝えたい、命を助けたという強い気持ちが入められている」

この文章を次世代向けの教材として3年前から防災教育を実践している。あの日から年月がたち、生徒の記憶は薄れつつあった。地域に根差した防災・減災について考えてほしい。今は15編を一組にして配り、共感した点や「これから自分ができること」を書いてもらう。震災や防災に「関心がない」と答えていた生徒も、意欲的に取り組んでくれる。

3日の防災イベント「3・11語り継ぐ若き記憶」は宮古市宮町の市民交流センターで午後1時半に始まる。入場無料で、宮古高放送部2年の女子生徒4人が15編を朗読する。13年前、4歳だった4人は揺れや避難した経験はかすかに覚えている。だが「災害のおそろしさは理解していなかった」と手をそそげる。

「記憶が残る最後の世代」として、地域の先輩が残した文章に触れる。戸村聖音さんは24年元日の能登半島地震を頭に「いつ、どんな災害があるかわからない。経験者の話を多くの人に伝え、守れる命が増えればいい」。小笠原あかりさんは「高生が話すことに意味があると思う。後世にどうつないでいけばいいか考えながら読みたい」と本音に臨む。

今から3年たつと、震災後生まれの子もたちが高校生になる。「どうしても記憶は風化するが、小論文に込められた思いを未来につないでいきたい」と小笠原潤さん。「いずれは、教員の誰でも活用できる教材に進化させていこう」

教え子がつづった小論文を手にする小笠原潤さん。「教員の誰でも活用できる教材に進化させていこう」と願っている＝宮古市磯崎・宮古水産高